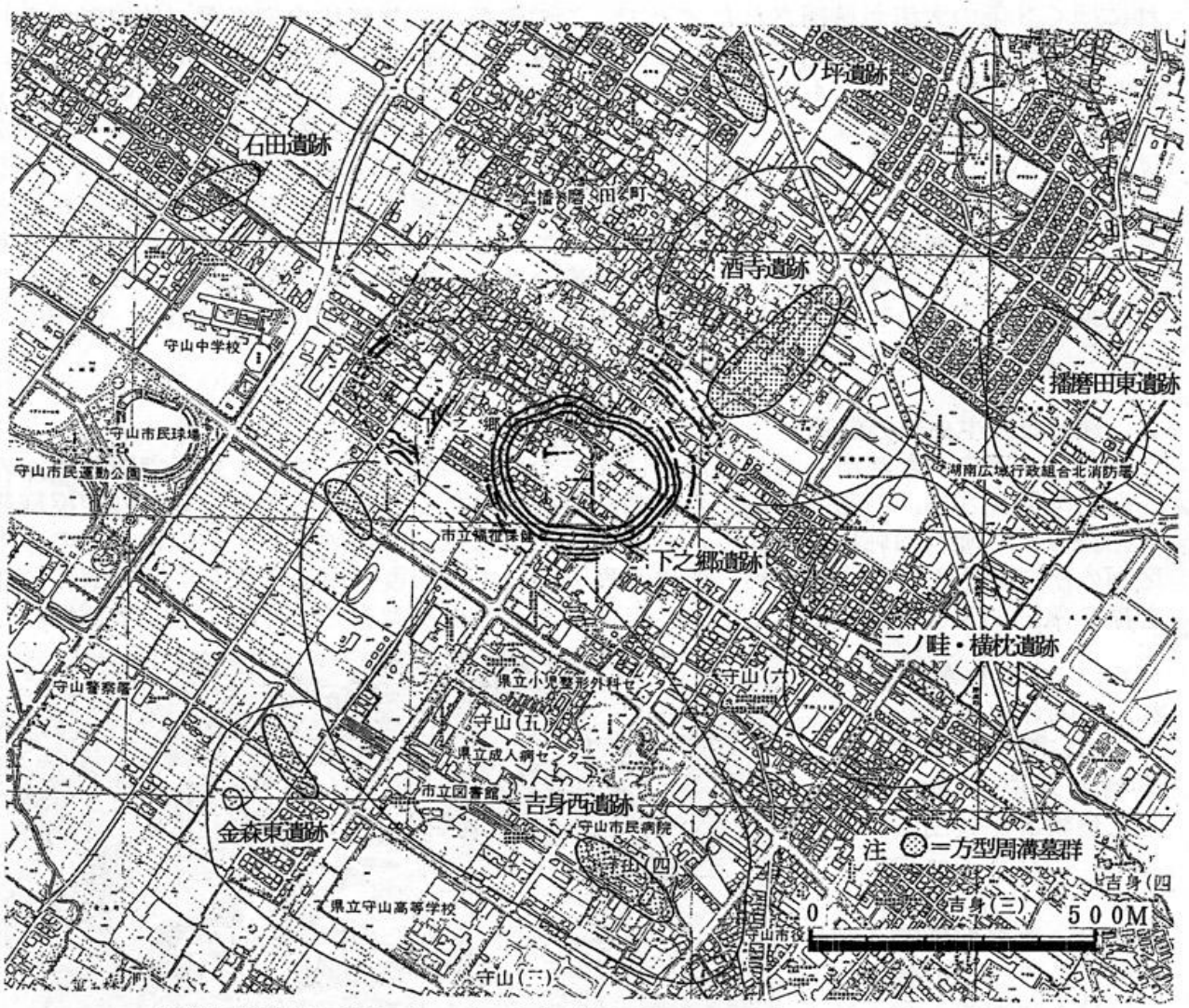
史跡下之郷遺跡発掘調査

現 地 説 明 会 資 料

==　第58次確認調査の速報　==



周辺遺跡地図　(下之郷遺跡の環濠と墓の位置)

平成18年１月28日

守山市教育委員会

遺跡名　　：　下之郷遺跡（しものごういせき）第58次調査
調査地　　：　守山市下之郷町字井上633の一部
調査面積　：　約１，０００㎡
調査期間　：　平成17年12月５日から平成18年２月末まで（予定）
調査目的　：　重要遺跡範囲確認調査

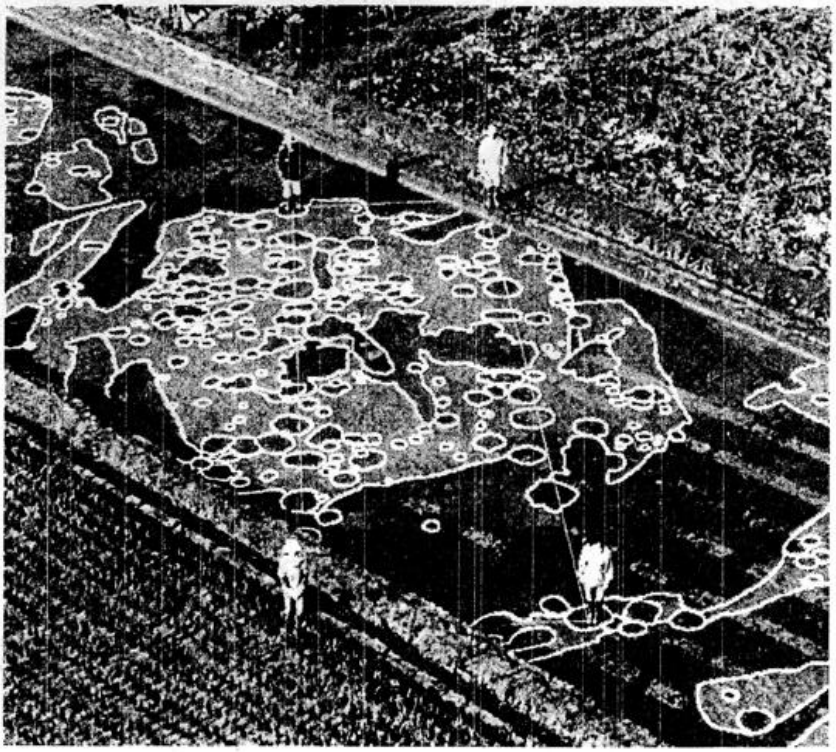
１．はじめに

下之郷遺跡は、1980年に行われた市の公共下水道工事の際に発見された遺跡で、これまでに57次の発掘調査が行われてきています。これまでの調査を振り返ると、1983年に行われた都市計画道路建設に伴う調査で、大溝３条が発見され、また翌年の調査でもそれに続く３条の大溝が確認されたことで、この遺跡が弥生時代中期後葉（約2100年前）の環濠集落であることがわかりました。その後、遺跡範囲の内外で調査が繰り返され、1994年の下水道工事にともなう調査で集落跡の北側環濠３条が発見され、環濠の周回する範囲がわかるようになりました。そして、1996年には集落北西部で堅固な柵や門柱が築かれた出入口が発見され、1998年には、集落北東側に8～9条もの環濠が掘られていることが判明しました。また、2000年に実施した第42次調査では、これまで集落の西端と考えられていた場所のさらに、約100m西側で大溝とともに井戸や建物跡が発見されました。このことから集落西側では、３条の環濠のさらに外側にも居住域が広がっていることが推定されるようになり、集落の全体規模は東西約670m、南北約460mで、面積はおよそ25ヘクタールにもおよぶことが推定されます。

２．環濠集落中央部の調査

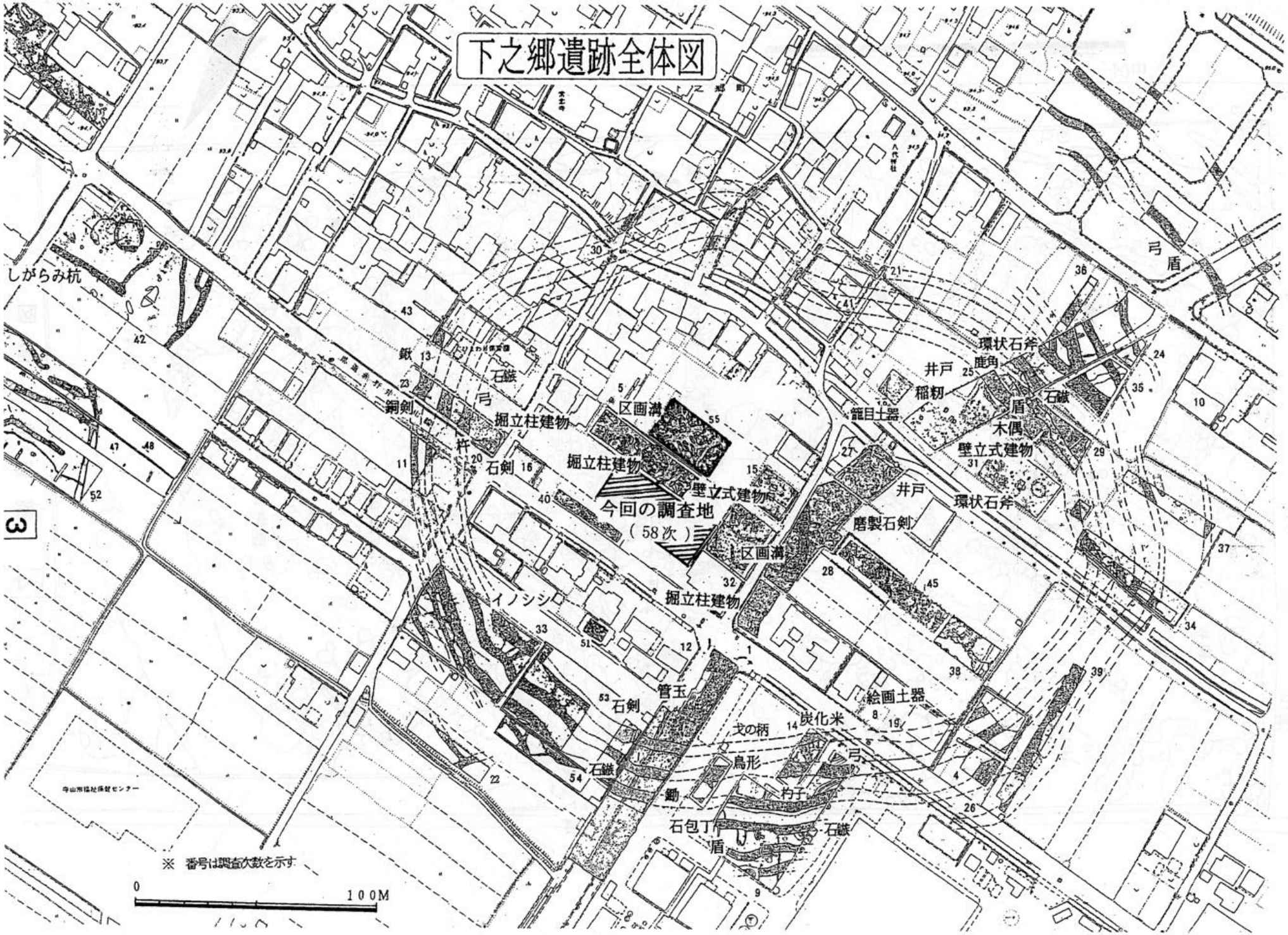
1998年に実施した都市計画道路建設に先立つ発掘調査では、集落中央部で南北方向の区画溝が発見され、内部や周辺から掘立柱建物跡がたくさん見つかり、集落の中枢施設を囲む方形区画（内郭）ではないかと推定されました（27次調査）。その後、この方形区画の所在を明らかにするため、空中写真を用いて地形復原図を作成し、区画溝の位置を探る確認調査をすすめました。2002年に実施した44次調査では、南北棟と東西棟の二つの大型建物が発見され、2004年（55次）の調査では、その北東側でも建物の方位（A軸）を整えた建物群が検出されました。これらの建物は、27次の中央溝（B軸）とは異なった軸線を持っていて、この二つの軸線の違いは、時期差もしくは集落内での役割・機能差の可能性があると考えられました。

そこで今回の調査では、これらの軸線に沿った建物が、周辺にどのように広がっているのかを確認するために調査を実施しました。



44次調査で検出された区画溝と建物跡

下之郷遺跡全体図


しがらみ杭
鍬
石鏃
弓
銅剣
杵
石剣
掘立柱建物
区画溝
掘立柱建物
今回の調査地
（58次）
壁立式建物
区画溝
イノシシ
掘立柱建物
管玉
石剣
石鏃
鳥形
鋤
石包丁
盾
石鏃
炭化米
戈の柄
弓
杓子
絵画土器
磨製石剣
井戸
環状石斧
籠目土器
井戸
稲籾
鹿角
環状石斧
盾
石鏃
木偶
壁立式建物
弓
盾
※ 番号は調査次数を示す
0
100M

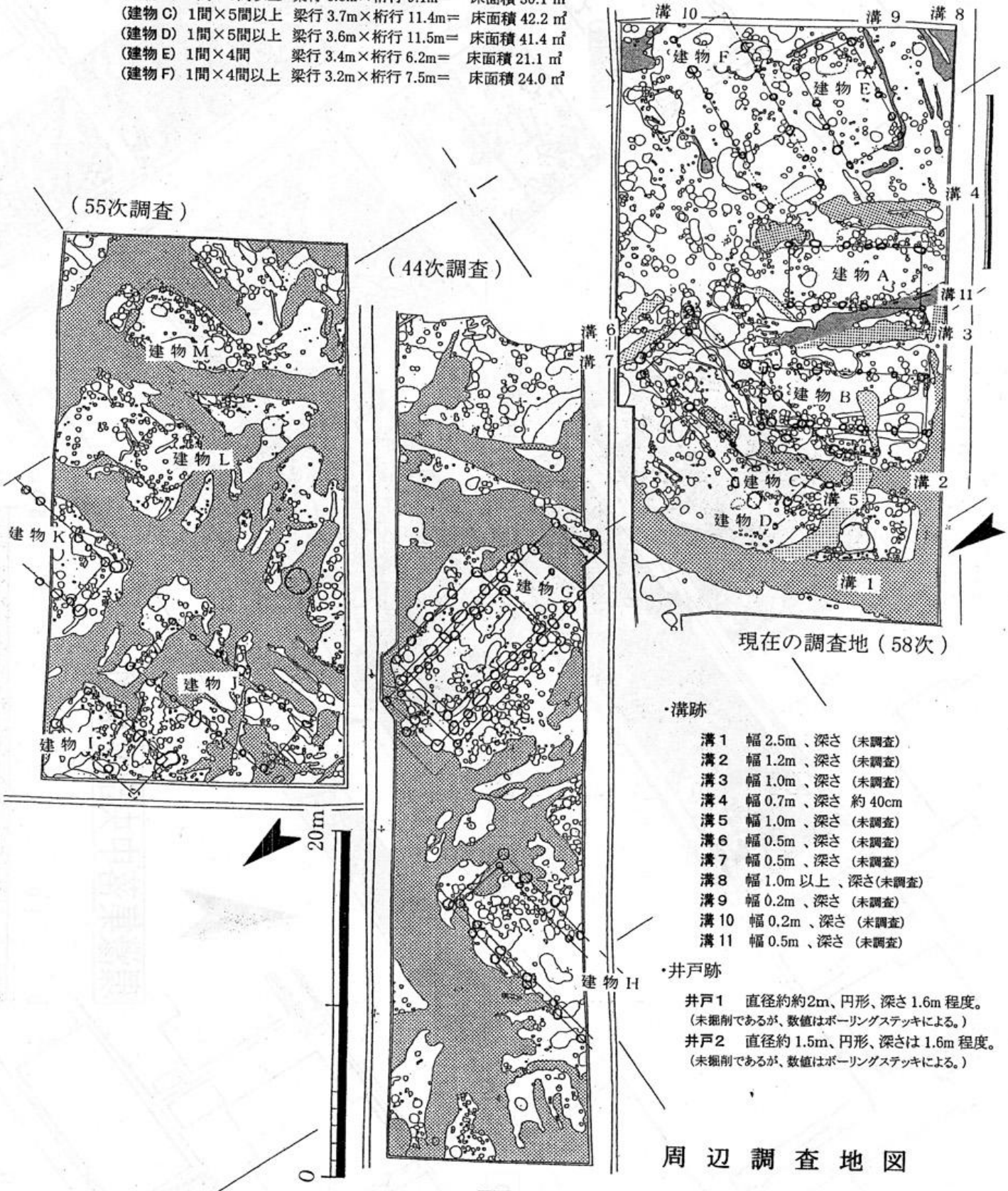
溝10
溝8
建物F
溝9
建物E
10m
0
溝4
建物A
溝11
井戸1
溝6
溝3
溝7
建物B
井戸2
建物C
溝2
溝5
建物D
溝1

4 調査地平面図

(58 次調査で検出された遺構)

・建物跡　6棟以上

(建物 A)　1間×5間以上　梁行 3.4m×桁行 8.3m＝　床面積 28.3 ㎡
(建物 B)　1間×6間以上　梁行 3.3m×桁行 9.1m＝　床面積 30.1 ㎡
(建物 C)　1間×5間以上　梁行 3.7m×桁行 11.4m＝　床面積 42.2 ㎡
(建物 D)　1間×5間以上　梁行 3.6m×桁行 11.5m＝　床面積 41.4 ㎡
(建物 E)　1間×4間　梁行 3.4m×桁行 6.2m＝　床面積 21.1 ㎡
(建物 F)　1間×4間以上　梁行 3.2m×桁行 7.5m＝　床面積 24.0 ㎡



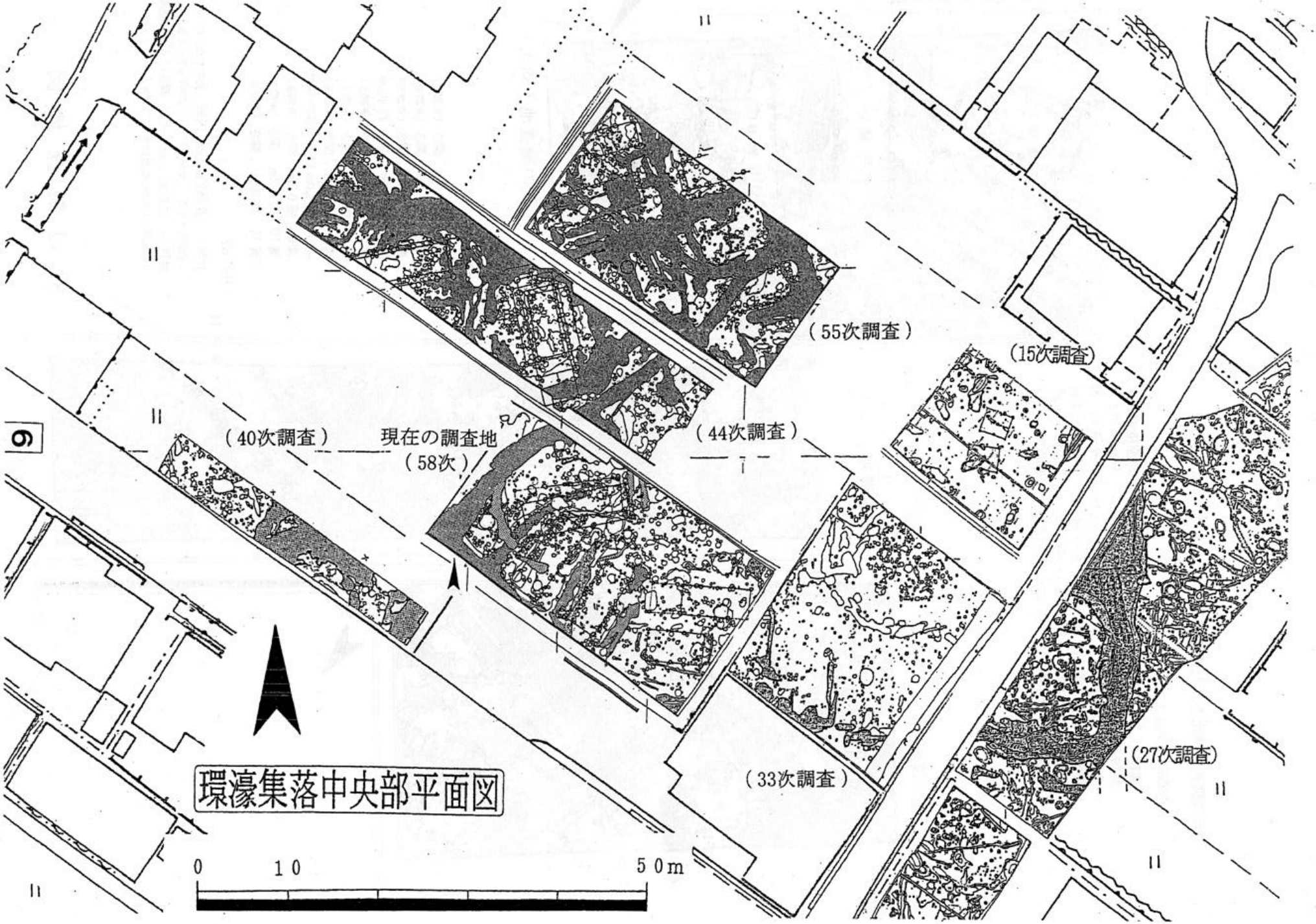
・溝跡

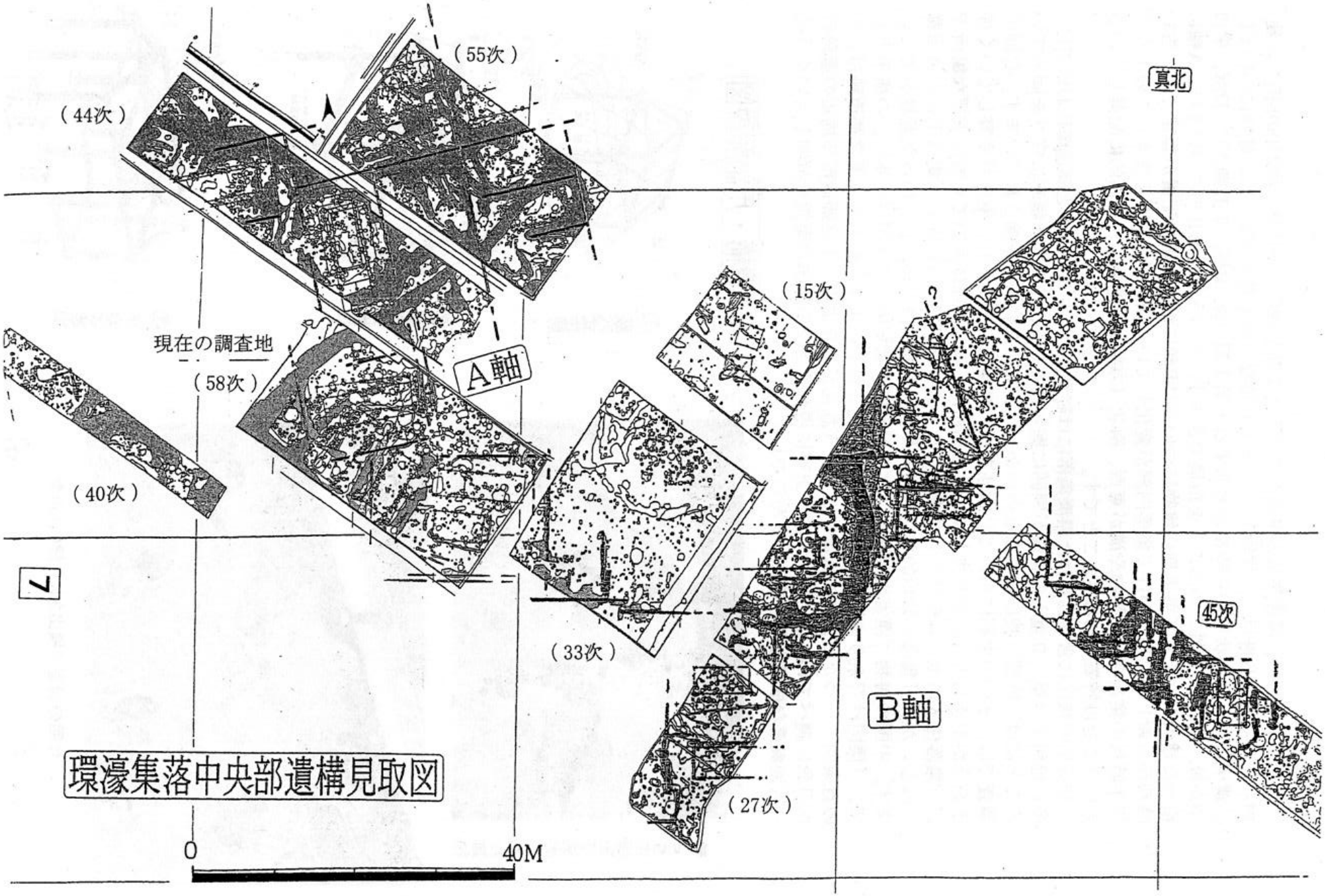
溝 1　幅 2.5m 、深さ (未調査)
溝 2　幅 1.2m 、深さ (未調査)
溝 3　幅 1.0m 、深さ (未調査)
溝 4　幅 0.7m 、深さ 約 40cm
溝 5　幅 1.0m 、深さ (未調査)
溝 6　幅 0.5m 、深さ (未調査)
溝 7　幅 0.5m 、深さ (未調査)
溝 8　幅 1.0m 以上 、深さ(未調査)
溝 9　幅 0.2m 、深さ (未調査)
溝 10　幅 0.2m 、深さ (未調査)
溝 11　幅 0.5m 、深さ (未調査)

・井戸跡

井戸1　直径約約2m、円形、深さ 1.6m 程度。
(未掘削であるが、数値はボーリングステッキによる。)
井戸2　直径約 1.5m、円形、深さは 1.6m 程度。
(未掘削であるが、数値はボーリングステッキによる。)

周 辺 調 査 地 図


環濠集落中央部平面図
(55次調査)
(15次調査)
(44次調査)
(40次調査)
現在の調査地
(58次)
(33次調査)
(27次調査)
0
10
50m



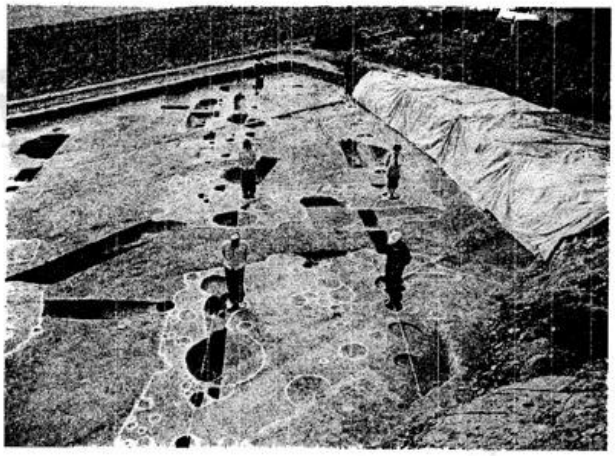
環濠集落中央部遺構見取図

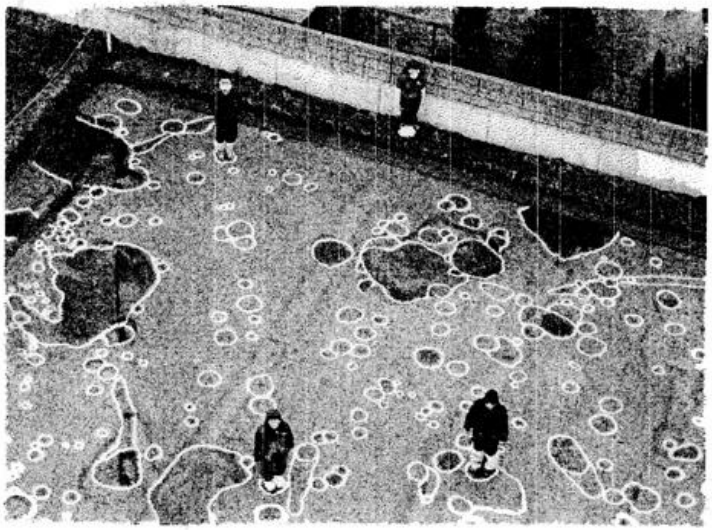
３．まとめ

今回の調査では、環濠集落の中央部やや西側で弥生時代中期後葉（約2100年前）の建物が少なくとも６棟以上（建物A～F）と井戸跡などが発見されました。建物については、遺構の切り合い状態から時期を大別すると第Ⅰ期がA、B棟。第Ⅱ期がC、D棟。第Ⅲ期がE、F棟の可能性があることを指摘できます。そのうちの第Ⅱ期については、A軸に沿った建物が、そして第Ⅲ期の建物についてはB軸に沿った建物配置が想定でき、古い時期から新しい時期にかけて集落内部が変化していく様子がうかがえます。このように弥生時代の集落内部の建物や溝が東西、南北（方位）を意識し、計画的に配置しているということは特筆されるべきことです。

紀元前の時代に営まれたれた環濠集落には謎が多くあります。下之郷遺跡においては，多い場所で８重、９重もの環濠が周囲に掘られており、こんなに厳重に守りを固めていることには、内部に特に重要なものがあったのではないかと指摘されています。今回の調査では、その中央部において計画性を持った建物が発見され、集落が変容していく様子がうかがえるようになりました。この場所は、集落内部においても特に重要な場所で、「集落住人の全てが祭りや政治をおこなう公共施設ではないか」「集落全体の倉庫群ではないか」「集落の政治的なリーダーや首長の館ではないか」といった意見がでています。中国の書物『漢書地理誌』には、紀元前１世紀頃の「倭国（日本）」の様子として、「倭国は百余りの国に分れていた」と記されています。そして、下之郷遺跡は、その百余国の一つだったのではないかという意見があります。下之郷遺跡や周辺の遺跡群を丹念に調べていくことは、中国の史書に現れる当時の倭国の実態を解明していくうえで大変貴重な成果をあげることとなるでしょう。

⇒ 55次調査で検出された建物

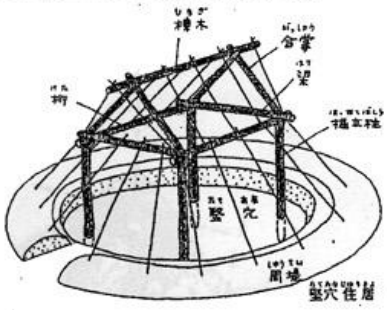




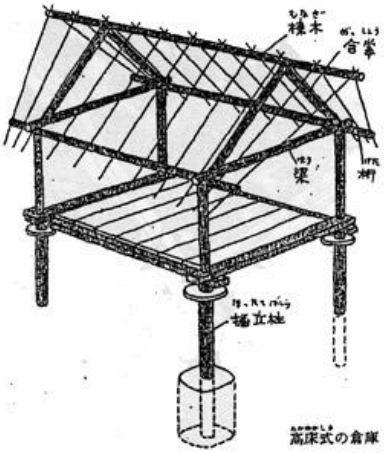
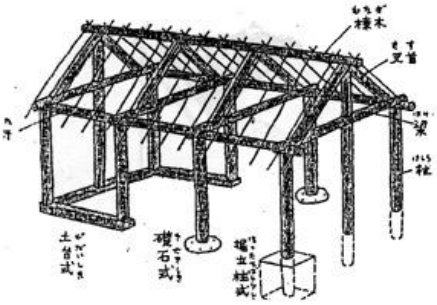
今回の調査で検出された建物（58次）

遺構・用語解説図

① 竪穴式住居



② 高床式建物



③ 平地式建物